（遞信省認可）

掲載要目

美妙齋氏の
韻文「元旦口号」及び
燈前小話

第七十六、七号

定價金五錢

明治廿四年一月五日發兌

饗庭氏の七艸

懸賞文藝二種

日に燒けるを防ぐ良法

文學小言

いらつめ第七十六、七號目次（明治廿四年一月五日）

小春日和（懸賞文藝）

元旦口号（韻文）………………………………山田美妙

日ニ燒けるのを防ぐ最良法

見得ばる

一種の屏風

佛國郵便局婦人

人の生長の比較

燈前小話（一）……………………………………勇妙齋

三坂嬢へ………………………………………………

馬除の羅襪（懸賞文藝）…………………………鹽澤庄吉

文學小言

作家ト西洋的文評＝戯曲方針＝猥褻

時鳥三十首……………………………………………千葉埴麿

新刊

変薄命＝入道殺

饗庭篁村氏其他の七卿

當世文學者の内君

不完全の愛と眞正の愛

抽象的と結象的

其他

定價及び社則　いらつめ一部前金二銭五厘郵税共金三銭、十二部金二拾九銭郵税共金三拾五銭、二十四部金五拾七銭郵税共金六拾九銭、三十六部金八拾四銭郵税共金壹圓○二銭か、四十八部金壹圓郵税共金壹圓二拾四銭○別製一部金三銭五厘郵税共金四銭、二十部金六拾五銭郵税共金七拾五銭、五十部金壹圓六拾五銭郵税共金壹圓九拾銭（郵税共前金領收の上で無くては差上げぬ事○府内に限り無郵税○毎月二回（五日及二十日發兌○金子御送り手数さへ郵便小爲替なれば郵便局とある處に（神田錦町郵便局）と記し受取人欄内に（神田區永町九番地成美社）と御記入の事○郵券代用は郵便切手の類い處に限り五厘切手で一割増しなれば妨げ無い事○見本は五厘切手で配郵共七銭御取の上差しよすつ廣告料一行金八銭・割引あり

從第六十八號至第七十七號十冊版權所有

明治廿四年一月四日印刷　明治廿四年一月五日出版

發行人　東京市神田區永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　東京市本郷區駒込西片町十番地居住　山本

發行所　東京市神田區神田永町九番地　成美社

○懸賞文藝新題

○第卅六回題（何でもよし）
右　人ヲ年端を送る……………………一月十日〆切

○第卅七回題（唱歌文章に限る
右　無言の愛情……………………一月廿日〆切

○第卅八回題（何でもよし）
右　嬉しいもの何でも三つ……………………二月十日〆切

○第卅九回題（唱歌文章に限る）
右　汐干狩……………………二月廿日〆切

○第四十回題（何でもよし）
右　櫻淡天女湖……………………三月十日〆切

賞品は菊水摸樣の金又は銀杯　右賞品は一等賞の者、二等三度ノ者、三等六度の者、四等十八度の者及び是と同じ資格ニ相當する者に限り進呈します。

○賞が重なつて數ニ充ゐる人は其賞を受け△題を詳細ニしるして賞品を御請求なさい。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第七十六號（明治二十四年一月五日）

第三十三回懸賞文藝應募得點

例言――今号から文章の中適宜一篇を撰み、充分こまかく添削をし、修文の便りとする事にしました。

○唱歌　題　小春日和

（イ）　松　乃（イロハ）

葉ぶき屋根の軒の下　小春の日和あつめたる（小春日和のうらゝかさ）
日向に一人座をしまへ、細りし
そでに笊を張る　翁の友に赤とんぼ　さばしは餘勢
振ふなり（秋の名殘とゝびかよふ。）
彼れの氣力も其のうでも（思へバむかし其腕の）　盛り
の時のあまたりき。　田村の家臣鬼冠者　仙道表に名
と知られ、　一騎一鞭千兵を　跡にのこし時ありし。
浮雲などの邪魔もなく（身にかゝる雲今こそ無く、）　風さ
へなぎてかげろふの　見ゆる思ひの菊の花、　集ふ犬
子の（犬の子）二つ三つ　餘念も無げに膝やとま
さてもうれしき日和かな。

評　趣向を立てたといひながら立ち過ぎました。

本吉　ミ　旧（カヒヲ）

（ロ）

小春の空の曇り無く　はれてまばゆき朝日影、　吹
く風あらで（風の吹かぬに）ちる紅葉、　もとちふきせけ
（て）吾が門と　訪へる友もち共々に　かたらひく
らすたのしさは（よ。）　たとふものさへなかりけり（ケ
ヅル）　趙衰は冬の日なりとも（ケヅル）　古へ人
もめでたりし　日影床しき小春かな。

香甫　少史（トヲケイ）

（ハ）

梢に織れる綾錦　小枝に宿る群鳥の
聲も靜かに聞ゆなり。　實に麗かの小春日や。
風暖かに空清し　東籬の許の菊の花
色香も深くにほふなり。　實に麗かの小春日や。

一一　女史（トヲケイ）

（ニ）

小春日和のおもしろや。　こゝに佇みまたのして
末野のけしきおひたづね（枯野の春にはくがれて、）　う
かれうかれて日は暮れぬ。　家路いづこそ野路（野邊）と
問し。

評　「野路」と「家路」と同聲が重なるのは惡いです。

橋　さち子（トヲケイ）

（ホ）

昔より　五穀の國と　さゝへられ、とよさかのぼる
君が代に　おふる民草　もたかにて、五風十雨の
ふる事を　かたりつぎつゝ　いそしめや。たりはかり入

納めなん。御くらの内の　賑合ひを　思へバ嬉し
此ころの　小春日和の　うらゝと　實にのどかある
雲ゐをバ　わふげバ空に　かげろふの　もゆるバかりに
おもほえて、いとうらゝかの　小春日や。　いとうらゝかの
小春日や。

（へ）　松洲(ケイウ)

三つ四つ二つ櫻ばな　返り咲せる其あたり（下蔭に）
胡蝶と見えて木の葉ちる　南おもての日だまりに
猫のねふりも靜かなり。

評　「其あたり」はほんの埋句です。全体の趣向ハ大難もありません。

（ト）　撫箏女史(ミノ)

のどけき霞ふゝねども　霧はいつしか（いつしか霧は）
きえうせぬ。　木の葉はすでにちり雲も（木の葉はちりて
雲もなき）　とゞめぬ空や小六月（空も匂ふか返り花、）
草根よ（草の根）あさるむら小鳥（むら鳥も）　春やき
ぬるとうたふらん。

以上七曲無賞

（チ）　耕雲(ナカロ)

春のかすみは立たねども、　彌生か花も匂もねぞ、
座ろこゝろも浮れ來ぬ、　思ひにしづむ身にも猶。

評　好着目

（リ）　紅山(イト)

梅のかをりはおらねども、　晴れし御空もかすまねぞ、
里の少女の手鞠つく　手さへ樂しき（のどけき）小春哉。

（ヌ）　本吉ミは(カヒ)

千艸よすだく虫れ音は　秋のあはされ耳よしも、
霜よ染そたるもみぢ葉も　さびしき様の目にも見え、
わびしかりしもいつしのに　衣かさねる冬の日と
なりよしもれを中々に　咲き殘りたる白菊も
消え後れたるゆきの色　梅の梢のかへりバな
見るにつけても鶯の　、、、、、、、、
そらあつかしき小春かあ。　なかねバかりの心地して、

（ル）　横山ひろ(カヒ)

霜をいたゞく白菊は　◎布をさらすが如くなり。
庭につもれるもみぢ葉は　◎錦をしくにさへ似たり。
梅やさくらのいろ〳〵の　かへり花さへ咲きいでゝ、
鳥れさへづる春よりも　あかめおはされ小春なり。

以上四曲第四等賞

（ヲ）　美少子(トウケイ)

小春日よりおはかゝれて、　咲きしもをかしあざし（か
へり）花　かすみたゝりをりしたひつゝ（あるか無きかの
香をこひて）　まふこそわそれてふく〳〵の　かよ里
きつさき折れやせん。

評　結末二句の趣向は非凡です。

（ワ）　菊野はな子（イバラキ）

秋と冬とのさびしさと　しばしよそあるかへり咲き、
落花とみだれ蝶もまふ。　うぐいすさそふ風もがな。

評　愛らしい趣きです。

（カ）　横山ひろ（ヒロシマ）

四方の山邊を見渡せば　風もしづかに空あをぎて、
にしきおりなす遠つ峰　再び匂ふ山ざくら、
花ともみぢと一ときに　見るぞうれしき小春のな。

以上三曲第三等賞

（ヨ）　永井直子（　）

都の春のあけぼのに　四方の山べは花かすみ。
そよふく風も暖かく　心のもつれとけそめて、
なもみなぐむる加茂の川。　細眉つくる青柳の
影もなそれに榮えつゝ、　梅のさえだも笑ましげに
匂ふ香もうぐはしく、　谷の戸いづる鶯の
聲ものどかに大君れ　御世もたけしと歌ふなり。

評　小春日和の意はなく、早春の意がありまそ。

右審査以外

○文章

（イ）　楓里子（オホサカ）

あけぼのゝ白菊より明け行けば、葎の虫の音やみて、夕べの霧名殘なく晴れ渡り、朝日影うらゝかにさし登りて、山てふ山の紅葉々は錦と晒らし、遠近の松柏なゞの緑りは眼やすめに觀るも嬉しく、流れてふ流れの水はきたへ（た）る劍ほどに淸くきら〳〵しくて、心も涼し。夏はおぞおしかりし野面さへさも艶美なる妙ある花野とかはりて、いとやしき稚兒の打群れて、野菊摘みつゝ遊び戯むるゝいとをかしく、道行く人の心もそゞろ思ふ事なげに渡りに乘りおくれ、ゑみ顏して急ぐあゝそいと〳〵おもしろし。あべてこの春めきてあかくに劣らねどすゞろに淋しれる小春の名に負かねなや。

碧溪　閑史（オホサカ）

（ロ）

小春の空のどかに晴わたり、日かげうらゝかになたゝゝのにさしいるゝ南窓の下に文机に倚て讀かけたる冊子を措て、其處此處見出したるに殘んの菊垣根に匂ひ梅がえに花の三つ五つかへり咲にさいたるをかしとやおもひけん隔てのうら紙のかげに物ぬひゐる女を呼びて、

男「ちよと來て見な。」

女「はい。何をです。」と起て來る。

男「あれど!」と顋で敎へる。

男「なんとやさしいぢやないか。」

女「何處にでそ。」

男「それ其處によ。」

女「見つかりませんよ。何處にです。」とれさへいふ。

男は女の脊に手をかけ、引きよせて、窓の外へ顔を出させる。女倒れかゝるやうに窓の敷居にもたせてやう／＼に花と見つゝて、

女「ほんとうでございますねエ。あれかをりますよ。鶯が來さうです。」とふりかへりて男の顔をぢッと見る。

男「さうさ奇麗なこと。」と女の顔と見いれる。女何と思ひてか、

女「ほゝゝ。」小聲に笑ゐ。男もにッこりする。しばらく事は絶えたり。此時兩人の心の中いかならん。もし他の人あらむ外見に種々とおもひやるあるべし。折から村雲の立ちまよひ、しぐれの雨さとふりそゝぎ、俄かに薄くもりたるに風さへそひて、散りのこりたる梢のもみぢ葉をそら／＼と吹こみ物さびしさ見ゆしまてあはれなるまぞ、

女「あれエ。」とゐあやりて障子をぴッしやり立てきる。

男「仰山な驚きやうだね。」隣りの庭には子守の聲、

子守「狐のおよめとまぢや。」次の間より、

下女「お夕飯を出しましやうか。」

冬の日みじかくて入相の鐘遙かにひゞき、早くも暮れたり。

茍園居士（シフマン）

（八）

「婆アさん今日はいゝ天氣でげする。」己れの綿入れは明日まで（に）出來べエか。」

「拵らへてくれべエ。何處へか行くのか？。」

「何處へも行かないの節句だらう。」

「さうか。まア烟艸でものめやれ。」

「あッちッ／＼／＼是は燒いた。火があッたあ。」

「おや／＼忘れてゐた。困ッたことしたあ。たんと燒いたク。」

「たんとでもねエ。」

「味噌でもつけろ。」

「もう歸るべエ。婆アさん頼むぞエ明日まで。大きにあつい御馳走になりやした。なんだか西が曇ッて來た。」

「はゝゝ若いものは氣樂だ。いつも道化ばかり語ッて。矢張り小春といッても冬と冬だ。」

（二）

氷野ひで（オホサカ）

涓々たる淺き流れ漣に映つる影さへ物凄く、嫋々と春空に舞ひし柳の枝の動く姿ハ猶更憐れの風情です。秋山に錦織りなす龍田姫の顏もやつれてふきくる嵐に伴はれ、小鴉の巣立なしける有様ですが淋しきうちにも今日ハ稀なる晴天にて白き空は曇りなく長閑に照らし渡りて快く覺えました。

「いゝお天氣さまぢやえなア。お日和ハ近頃の貰ひものよ。」

と獨語ちつゝ椽端に脊を曝らし、一寸二寸と引き出す糸は初孫の春衣の足しにもがなと餘念もたえて納戸のうちに炬燵

を臺に古今集を讀みし翁の晴と慕ふて立ち出でたる怜悧しき孫は透もなく米俵を運ぶやうに兩手に坐蒲團を抱きて足も千鳥に、

「お祖父さん……」

「お祖父さんに……賢い〳〵」

軒に干したる柿とりて

「お正月のを一つ貰ッてあげるよ。」

と小さき手に大きい柿を渡せば莞爾 笑ッて戴きながら翁の膝に倚りて坐りぬ。 高く山茶花を仰き、低く菊を眺めて、小聲に花の色は移りにけりな……人の心を知らぬ幼子はもどかしさうに、

「お祖父さん！ お祖父さん！」

「びッくりしたよ。」

車の手ととめ向き直る媼。 花を後ろに翁も

「大きな聲よ。」

「最前から玉が鼠とると言ッてるに……」

媼は煙艸燻らしながら、

「暖かいから玉も喜んでるのよ。」

「あれ玉は細い長い眼をしてをるよ……」

脊伸して媼の膝による猫を見て、

「玉よ待て私が抱かれる」

と走り寄りて、 突き落とせば、 犬の後に餌とあさりし雞の驚きて、 庭の樹高く飛び上がれば、 枝に殘りし枯葉は時ならぬ山下風に翩々と散るを見て興に入りしが手を拍て笑ふ孫に絆されたん翁はわッは……媼も空打ちながめて、 ほゝゝ

「可愛さうに、」

まだ聲も終らぬに

「あれ隣りのお祖父さんが……」

「これは〳〵ようお越しなさッた。 さアお懸けなさいませ。」

「今日は春のやうで延氣に（で）よろしいから内に居るのも……出かけたれでござんす。」

「それは〳〵結構なことと……孫を相手に延氣して居た處ぢやが……あんと權兵衛さん思へば月日も早いもんぢやの。 連れだッて寺子屋通ひもつひ此間と思ッてゐたがはや孫が學校へ行くといッて毎日叱る樣になッたから仕方がないわッはヽヽヽ」

「學校で思ひ出したがあれお悴も洋行とか云ッて六年ぶりで戻ッて又東京へ出てからどうしておいでるのぢやあア。」

「されそのことよ。 權兵衛さん悴は家内中こいといふから困る處ぢやで。」

「孫もどうあッても寄こせ。 東京で學問させるといふからやらねばなるまいし。」

「でもばゞのいぬやうに孫とやッたら自分も行かにや居ら

れず、氣にかゝッてなア……孫ほど因果なものもない。はッは、、、」

「そもそれと此二三日も妙に春めいて來ましたな。」

「ちがひない十月の小春とは此ことでや。」

評 家内團欒の趣きハ美事でした。文章も趣向より落ちました。

(ホ) 藤元あさ(十七)

晴を喜ぶ雀の聲噪がしい椽の下に藁の席を横に敷いて、坐するハ白髪の翁媼。七十路の木枯しやうの脊をば暖かい日影に炒りながら樂しい昔の遊山バなし。

「喃これお媼や。今日のやうな好い天氣になると昔の想しうなるわね。若かッた時分にハ……ね今頃ハ箕面山の楓見やら、端山のお屋敷へ菊見やら……ね。」

「ほんまに彼の時分には若さと云ふものは一寸とも知らなんだな。毎日々々お前は好な酒をあがる……そして此の妾に、『梅がぬしなら柳がわたし、中のよいのか、すねるのか』山の月を三味線に合さして……今から見ると丁度夢のやうおやな。」

「ホ! 夢で思ひ出したがね。昨夜此おれが面白い夢をたのぢや……何でもお媼と一處に畠で大根の艸ぬいてゐたら……ホヽ……こうッと…何でも彼の鹿公が來よッて……もう忘れて仕舞ふたな、早いものぢやわね。」

「どうも年を取ると忘れるのが名物と見える。此妾も今朝面白い夢を見たが何でも若い時分のことぢやッた……もうちやんと忘れた。」

「協はぬね、此様になると……あらお媼！ 玉が彼様ないたづらを。」

「こりや玉よ。其様な殺生を爲るな……な……蝶よ早う逃げ、蝶よ…ゑらい奴ぢや、逃げよッた。」

「一寸とも鼠よう取らせに、いつも巨燵へ這入りやがッて。」

「ほんまにバカな猫ぢやわ。今日の様な暖かい天氣ぢや直に殺生を仕やがるな。あほな玉ぢや。」

以上五章無賞

(へ) 名城しげる(イハシロ)

秋色錦を織りなすの候坐ろ故國の風景を追想して、轉た懷鄕の情盛んに、机へ對ひ首を垂れ、兎や角う沈思すれば万感胸に溢れ、他念なきの折、不圖後ろより差し出せる一封の書。手に取り表裏を讀み下せば今も今如何ならんかと焦思せる懷かしき慕しき兄よりの朶雲なりき。流るゝ月日は堰きあへで、過ぐる光陰に關守なければ分袂以來早くも三年、山川遠く隔つれど水魚の因みは今に絶えず、四季折々はいはずもがな、朝な夕なの御厚情、果ては毎週の御玉章、芳恩何れの時か忘るべきとは云ふものゝ、如何にせん其日々々の身の生活益なき事業に日を送り、今年も半……落花の雪に踏み迷

ふ交野の春の櫻狩り、紅葉の錦看て歸る嵐の山はいざ知らず雞犬閑暇なる片田舍は秋已に深く小春の節とはなりぬ。衆芳容姿を競ひ、啾々喞々たる天然の音樂は止んで、聲なく寂として見るなし。隙漏る風は肌を透し、思はえず火鉢の埋火搔き起す、宜なる哉彼の那須山、安達太郎山の頂も數日前に早眞白なり。去れど日中の温暖は常に七十度に昇降し、單衣にて凌ぐるゝまゝ幽窓默止し難く、つひうか〳〵と郊外に出づれば金穗毿々うねり〳〵て幾万項、彼の鐵道橋下に住み、八百八町連檐の地に成長せし人の知らざる處眞に賞すべし。昨日まで綠濃く小黑き見えなりし林は何時の間にか綺羅錦繡の美を重ね、續く山々峯々は何れ源氏か平家なる維盛卿の富士川對陣、歸る雁がね心せよ。羽風強くば散り〳〵ばら〳〵飛んで天外の賓とならんありさま、實盛氣取りの巨杉老松傲然山腹に榮華を極め、光盛の高嶺に窺ふを知らず、蓊鬱として翠り滴らんとするは特り吾が國の專有此上なき美觀なり——嗚呼見るべき人の見るならば如何に樂しきことなられに、吾れも却ッて憂さをまそ。

竹下山人

（ト）

日頃百色の錦に身を裝ふた山々も今は手荒い木枯に衣も剝ぎ取られて、あはれ見る影もなくありました。しかし花の早い所は紅葉の遲いが常。まだ錦に包まれて秋の名殘を殘してゐるのが山家の神無月でも。時雨の續いた空合ひも今日は朝霧とゝもに晴れ渡ッて、風さへ靜かに木の間々々々は宛ら緋毛氈のやう、又春の野邊に千種の艸花が色を競ふやうにも見えて蝶の居らぬのが怪しまるゝ程。其時ひとり紅葉を踏みもて彼方此方を戯れて居るのが頑是ない一人のうなゐでした。敷きつめた木の葉とやゝ拾ひ取ッてはまき散らし、散らしては取り集め、暫しも餘念なく興じましたが、急に向きをかへて庭口から、

「かアちや！　かアちや！　あのお祭りは何時？」

「お祭りを？　お祭りは來年だよ。坊がこれはせ（だけ）になッた時……」

右手の人指指を左手に添へて見せながら答へたのは母でした。

「でもかアちや！　坊はお祭りに行きたい……よ。かアちや！」

「坊は忘れたね。赤い花の咲く時でなければお祭りはないんだよ。」

「忘れない〳〵赤い葉が澤山あるに花のやうな……」

「だから外へ出て遊ぶのだよ。ほんにお祭りの時のやうだねエ。さア出て遊ぬれたよ。」

北田あさ

（チ）

楓葉散るにつけても思ひ出すは妹のこと、丁度去年の秋の頃なりし小春の空晴れ渡り、鳥喜ばしげに鳴き騷ぎぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

もの淋しげなる秋の景色も其日のみは自から優に鹿鳴艸の名空しく、芽萱の下ゟ小兒のみ打ち寄り遊び戯るゝ聲喧し。憂しや外面ゟ引き換へて憐れ重なる涙の床に我が妹は打ち伏せり。　見るにつけ、思ふにつけ、怨みは我家の垣ゟあり。此垣一重ぞ悲喜歡樂の境なる。　七尺の屏風もなほ越ゆべきに此垣のみは越え難きか、世濁りて、惠て天にもなきものか。　玆を棄てゝ誰をか助けんとする。　憐れ今や妹は枯野に立てる撫子に似て、吹かば散らなん玉の緖もつなぐに由なく、さりとて又血縁の恩愛絶つる由なく、我身獨り哀しむかとばかり胸充ち涙溢れぬ。　嗚呼今ぞ妹のつきなき笑、愛らしき聲も只我心に殘れるのみ。　思へば皆哀しき紀念ありき。　今となりては斯く麗しき日も何かせん。　愉快氣に誘ふ人の聲も腹立し。　何樂しきとて隣家のものは楓狩りなどに行けるや、人の憂ひを他所に見て。　曇れかし、雨降れかし、世の人皆憂ひを分かさん。　然れども空はますます麗かに、我心はますます沈む、人は皆出で〻留まるものなく四方ますます寂然。　誠や今日は我身獨りの秋なるらむ。

三坂きぬ(サカヒ)

評　文に中々勢が有ります。

草(り)

草に食む大の牛一匹、除て廻ッた路のりは凡そ小半町、此所は誰の家屋敷やら、垣と仕繕ふたは自然の木々、其木々も歸り花さへ二つ三つ、根からくゝるやうに出て來るちよろ〱水の流れに沿ふて別に影を醮すはしはらしい野花、青いのは昔し學校の歸りがけ採ッて書物の繪を彩ッたこともある發艸、黃色なのは扨何といふ花か頭のかざしと折ッても誰が一指を切るとも咎めやう。　小さな石橋を渡ッてやがて見て入ッた森のひとむら、西日の爲めに木々の紅葉は「ひたくれなゐ」錦といはふのあやといふか物思はぬ顏にも恥かしい色をうつしたでしやう。

「おや朝ちやん、あれも百舌鳥じやありませんか。」

「さうですよ……『秋鴂一長鳴夕陽穿古樹』―ほんの今うかびました詩。如何でしやう？」

「相變らずお敏いこと！　六ケ敷ッて分りませんよ。」

「はゝいうなくッて分らんのでしやう。」

「いやな！　そんなことがありますものかね。」

「並の文學者の及ばぬ御腕前……さとのやさんの御見立ては何かの花でしたねー貴孃の御文章は。」

「はゝ、批評にも何も乘りますものかね。　妾のは此のざしよしたのと仝樣、小春日和に咲き出した名も無い―例へればー花ですもの。」

愛友藤元孃と袖を聯ねて野邊に靜けく賞觀した天の美、これでこそ九十日―其春の外な春に荅へたといふもの。　あゝあの市井塵多い中、入れ過ぎた手入れに其眞性ともぬけの蝉ともなッた消れ影、取交す數の盃に喧嘩雜沓してそれで嬉し

がある人の氣が得解せん、とも家よ歸る路すがら話しました。其儘斯く……

評　此文中「身は入ッた森の一村」とありましたが、此倒句法は餘程鋭く言ふ處で無くては餘り用ゐぬ方が宜しいです。それ故此處でも「身は森の一村へ入りました」とやはり平易にした方が却ッて風致は損じません。

蔚(ス)

撫箏女史(ミ)

蔚ッてゐた庭の木立もはや枯嵐の誘ふまに〳〵……(ケヅル)梢にさらひ(し)た唐錦も今は庭と(に)敷きつめて麗はしい絨氈とも見えるバかり。彼處の(ケヅル)築山の崖の下から吾れは顔よ生ひ立ッた寒菊一本。それさへ霜消露の薄化粧して、垂頭れたる(た)さま誠に羞かしさう。その可憐さ!! 生垣の上(に)高くさし出た垂(ケヅル)柳、その枝は常よりも長く垂れて、ゆたかに微風を待つやう。そのしなやかさ! むれ渡ッた小鳥の羽かせに落ち殘ッる木の葉がひら〳〵と一葉、二葉……大陽もぼんやりと光線を放ッて(して)冷めたい空氣を温めるに餘念もない。あゝ見える(目にふれる)ものはたゞこれバかりです(した)。さき(な)らバ聽えるもれは? 皷膜? その名に脊いて微かなる響きさへ感じません(ケヅル)。あゝ閑靜! まことに閑靜の極でも(但し何も聞えぬ一個閑靜の天地!)

此方の書齋、横手は丸窓まで一障子締め切ッて一凡て雅びの好み(ケヅル)、あゝゆかしや(い)と見まもるうち。發矢! 始めて空氣の波動(人の聲)がその障子と洩れ(て)來て、あはれ皷膜と打ち(ケヅル)ます(した)。が、甚だ微弱です(ケヅル)。その波動(聲)のもとは? 鋭くて優しい微かに年若い令孃の莟なす口からでせう。思へバゆかしさもまた一層。斷……又……續(ケヅル)。

「もうゐん?……二時すぎ……今日はよ(い)ゐ(御)天氣……丁度春……玉と膝の上によう(く)寐……あゝねむたくなッ……………」

❁　❁　❁　❁　❁　❁　❁　❁

「れ孃さま、お孃さま、もうお起き(あそバ)……燈火を点けましたよ。お孃さま、お孃さま。」

「おやもう日暮? 日の短かいこと……」

目と擦りながらブックと机れ上へ片付けて、ア、と脊延びしつゝ(て)、丸窓の障子をあけましる。大陽もはや深く西山に沈んでしまッて、其(ケヅル)名殘を(といふは)がーッと紅(夕やけバかり)。遠寺の晩鐘(晩鐘が)夕霧を破ッて幽かにひゞく音、ボーン。

以上五章第四等賞

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治二十四年元旦口號　山田美妙

年も立つ　門松も立つ、
　冬ふかき　春まだ立たぜ。
一寸の　ちゞら何ほぜ、
　霜ばしら　大地をさゝげ、
名ばかりの　あやし若水
　面やつれ　氷よしぼむ。
地をさゝぐ　その元も氷、
　面痩する　そも凝れば霜、
黒白も　思へばひとつ。
　世に道と　いまも見えけり。
一里づか　ひとつかさねて
　われも亦　廿あまり四つ。
まさ〳〵と　耳よも殘る
　ゆめうつゝ。年の關は
つごもりの　鐘の百八
　煩惱と　撞き尽くしたり。
しほらしや　瓶に咲く梅、
　炭の香に　うごく花びら。
身のつとめ、一間は春も
　厭はずて　笑まひけだかし。

かれやなぎ　入りのこる月
　年の瀬よ　ぬみかたて澄む。
しろのねの　輪をきしらせて
　そも春を　いざなひよ行く？
青ざめて　西へたどりて
　そもつかれ　なぐさめに行く？
いづれにも　たれしきたはひ、
　月はさて　たふとかりけり。
水に霜、花にまた月、
　物すべて　人の見るまゝ
右ひだり　道を教へて
　さとり無き　嗚呼この天地—
あらさまる　年もろともよ
　あらたまる　心ありしか？
嬉しくも　世をきよく見る
　目ぞいまは　十二ヶ月の
こぞの塵　拭ひたりける——
　けふと今日の　我ぞ世に住む。

日に燒けるのを防ぐ最良の法

今すこしく時候違ひの感もありますが、冬とても日に燒けぬもので無し、寒さを避けて海水浴などに行々ば自然折角の顔の色も黒まる事です。　で無くとも南向の日あたり好い一間などを閉め切ッて思はぬ暖氣に絆され、縫物などして居れば何うしても亦日に燒けます。　冬とて決して日に燒けぬと云へず、之を防ぐ法の心得もそれ故不用でも有りません。　幾度も見れ〳〵は當雜誌に於て此日に燒けるのを防ぐ法も記し、檸檬が極めていゝと說きました。　全く是は違ひ有りません。　が、それと同時に持つべき心得、其注意も亦必要なのです。　檸檬のみで成効は無くも無い、それながら諸孃れ之についいくの評と聞けば地方など處により之が得難くて常の用に立たぬとの事で、またそれを得易い土地にしろ、價が極めて廉くても無いため大に費用がかゝるとの事です。　成る程一應御尤な評、それ故に今吾々は別の注意をこゝへ載せる事と爲りました——幾分の檸檬に代用する迄に。

そも〳〵藥劑といふものは病ひと治すための物、其病ひが無なれば言ふ迄も無く藥劑は入らぬものです。　日に燒けるのも一つの病ひ、其燒ける原因をまづ除く方が元より藥劑を

用ゐるよりも正當な手段でしやう。　それ故に病ひに藥劑は万止を得ぬに限ッて用ゐるべきもので、吾々が今言ふのは日に燒ける原因をあらかじめ療治することゝです。

無論日に照らされゝそこそ日にも燒けます。　が、養生次第により同じく日に照らされても燒ける燒けぬの相違が有ります。　其養生は何かと言ふに、實に容易な事なのです。おの〳〵が毎日用ゐる飲物と食物、及び衣物、この三つ、是等が實に日に燒ける事に大關係を持ッて居るのです。

甚しく肉食をする事、是が日に燒けやすく爲る一つの原因です。　冬ならば猶兎も角も、是が夏へ凄まじい程の害と爲す物なのです。　誰も知る通り肉食は体温を增す物です。あまり過ぎた肉食から体温が殖える、處へ外部からは日に照らされ、又は潮水で衝動される處で内外れ溫熱が一時に合併して其處で見る間に皮膚は損ぜるれです。　殊更きッかり身体に有いた衣服（婦人洋服など猶）がよるいので、よし和服でも帶の邊をきびしく縛るれが總身の血を顔や手の一局部へ逆流させ、鬱積させる原因で、實は一つで是で早く日に燒けさせるのです。　それ故飲物などに至ッても甚しい衝動性、刺激性、興奮性の物はいけません。　茶、咖啡、チョコレー

トの濃いの、烟草、亞爾格兒の強い酒、度の強い酢、新らしい番椒、胡椒、山椒、いづれも避けるべき品です。

これも平素の心得です。　是ばかりでもいけません。　更に行ふべき手段は此上に尚二つあります。　いづれも心持の實はあまり好い事でも無いですが、肌のためにも究竟です。即ち、其一も新鮮の牛乳で夜寐る前顔あり手なりを滌ふ事、其二は毎朝胡瓜の絞汁で顔あり手なりを滌ふ事、この二つです。　それからして石鹸も成るたけ強く肌に揉きつけず、如何にも柔らく用ゐ、猶顔あり手なりを拭く切は頗る手當りのい丶、柔い物をえらむのです。

見得ざる

見得ばる、即ち虛飾、是は男子にも有る性質ですが、ことに婦人にも有ります。　甚だ德を害ふ事で、忘れても分外の見得ばりは避ける事です。　西洋に斯ういふ言葉が有ります。「虛飾も心の小さいのと心の弱いのを人に示やうなもの。」

一種の屏風

廢物利用とは是等の事、古い印紙を集め揃へ、美事な屏風を張り上げた妻君が近頃東京にあります。

佛國　郵便局婦人

近信の外報によれば、近頃佛國政府は婦人に對し、大に寛な制裁を與へたとの事でした。　從來佛蘭西の郵便局には多數の婦人が役員と爲って働いて居ましたが、これ迄は政府でこれら奉仕の婦人の結婚につき恐ろしく干渉しました。干渉するだけならまだしも、自由に結婚をさせませんでした。處が此頃に至り、やうやく此禁が解けました。　解けて今のところでは婚禮する事も自由になり、たゞく是等の婦人に限り、警察官と婚禮するのを禁ずるのみとありました。

人の生長の比較

小供の身丈の延びて行く割合は男と女と同じくなく、そして年に因って相違があるものです。　先頃さくそんで二万一千人の兒供について撿らべて見ましたら、生れてから十一歳までも男の方が女より身丈が一インチだけ餘計に延び、十一歳以上十六歳までは今度女の方が男より一インチ多く育ち、そしてそれから以上は男の方が延びる勢ひが復強くあるといふことを發見しました。

燈前小話（一）

美妙齋主人

燈前小話は其名のとほり端物即ちスケッチを蒐めた物で、或ハ他日の小説、韻文などの材料とするために書き集めた物なのです。素より纏まッた物でも無し、さて又隨筆と――普通に言ふ――それとも多少違ひます。歸する處は端の物語が多いのです。其物語りも千差万別、或ハ人から聞いたのも有り、或ハ筆者が自分見たのも有り、一概に何から獲た材料とも限らぬ、それ故に、言はゞ玉石混淆、面白いのも面白く無いのも、思ひに交ッて居る事でしやう。

小話第一　乞食の子供

大祭日などの人足込む日淺艸公園を散歩して第一に驚くのは乞食の人に跟く事です。一二年前迄ハ眞逆に此類も無く、路傍に筵を布いて哀れに情を乞ふ夫等が形ばかりに有るのみでしたが、今ハ中々そンな生鈍い手段ハ不用と乞食の方でも鼻先鋭く、人を見れバ側へ寄ッて所謂袖乞の言葉を實行する樣正に田舍道の佛閣までを附け狙ふそれらと同じです。巡査も、見れバ咎めずには居ぬ、但し其目をくゞッての上の事で、而も逃路を巧みに作ッて親たちの命の下、人に附きまつはるのは何れも子供で、一旦咎められゝバ親たちを纔く高見で見物し、つまりを叱責で事を濟む――その叱責も馴れゝば平氣、世界一般の人間からつまりは自分の乞食達は叱られる物と覺悟して、一叱り叱られゝバ首をちゞめて言はれる儘。直に巡査が行き過ぎれバ、其生まれて以來八九年嘗て人並の料理の味も知らぬ舌を出してぺろりと遣ッて、嫩風の過ぎた柳も及バぬ鹽梅に澄まし、飯の上の蠅もやき、直にまた相手を見付けるバかり。

つら〳〵見れば情なくも爲る、事あたらしく万人平等と言はずとも、是も彼も同じ人間。人間でそれで花のやうな纖弱鋭敏な心を直に生まれ落ちた儘奴隷に染みさせ、自尊の念の自重の心などは是が金殿玉樓を知らぬより知らぬ、何もれの親か、合力の言句を口授して、「旦那さまや、奥さまや。」料理屋の掃溜から盜み取ッた殘飯、食ひ殘しの口取、それが天地唯一の是等の珍羞で、即ち合力して呉れぬ相手に向ッて出した舌を其儘皷ッて旨いと稱美し。隙を漏る風、それも肌馴れて有るか無いのに身做す時、親の前にうづくまッて何の指南を受けるかと言へど、合力の文句の謠ひ方！　もッと哀れッぽく、もッと悲しく、もッと涙の出さうに、またもッと聲をふるはせて――あはれ此娘五六歲の花の蕾、そも〳〵

良家なら唱歌の稽古にさう言はれる處を、引き變へて、何ど無心の稽古！　心は凍えぬ間に身ハ早凍える、凍えもし、眠くも爲る、わなく／＼と胴ぶるひして、其下夜船を漕ぎ出せバ「畜…生」とバかり言葉にも念入りの熊鷹爪で抓られて、——ちッ！泣けバ、強面い、また抓られる。　やうやくに熟達して、合力の首尾が上出來で、五厘の一錢を攻め取ッて返ッて來れど、親と譯も無く乞食仲間へ吾子の交際を吹聽して褒められて矢張りまた嬉しく「わいさ、御前たちが入る時にや賃貸しにしてやるさ」と、ても、ま、子供を賃貸しに！

物哀れな聲で一町も二町も、追ッても叱ッても去れバこそ跟いて來られた時の心もち、其聲の哀れッぽいよりて其哀れッぽいのに熟せに至ッた境遇の哀れさが身に染まて、而も西東いづれとも爲る落花流氷の初め無邪氣な少童が敎へられて斯う迄爲り、また終は是で終り果てるかと思へバ、合力の鎖を擲つより何より、胸は人世の奇怪な事實に且は不審を以て鎖されもしました。

寄書

三坂孃へ　　撞澤庄吉

犬でさへも何か思ふときはわんと鳴くとやら、下手の横啫と言ふことがありますが穴へ入るまでも文學殿とは離れまいといふ馬鹿者。先つ頃意見を一寸バかり述べましたの、もとから片時考へて一時にかいた類でもなく、淺ましい量見ながらもやつがれハやつがれだけ昨年からこのかた從い腦髓を絞つたもので、漸く一とまとめになつて、熟れもせぬ言文一致で書いて、神聖な記者さまといらつめ方の綾羅錦上に捧げた譯でした、勿論御斥けになることゝハ存じたが、案に相違して美妙先生には過分の褒辭を戴き、今亦折角の御敎授も受けましたハやつがれが身にとりて何程喜ばしう御坐いましやう。が、すぐにお答申す譯でしたが因果な病痾にかゝりまして其後しバらく筆をとることが出來ませんでした。それ故御答辯も延引仕りました。只今つまらないことを述べる積りで御坐りますれバどうぞ一覽下さいませ。

文學篤志な御方とハ豫て承知して居ましたが、何さま一言一句全篇貫いて御熱心の情手にとるやうに顯れて、ひよわいやつがれなどハよりつくべくもありませんが、同士の好み、縱令千里を隔てやうと心同じなれバ千里も合璧とやら云ふた古人もありますれバ、今後願くバ斯の道の爲めに御盡力下さいませ。

私しが「文章の一定しないのハ文學の一定しないのだといつても差支ない位」と言つたのハいかさま失策、明僚な御鑑念のない以のも御尤もですが私しの意見ハ文字外に意味があるのです。　言ひ樣のわるくて文字から解釋すれバとり處の。ないのハおそれ入りました。私の底意と言ひますれバ文學ハ文章だと言ふことも出來ねど、文章ハ文學だと言ふことも出來ませんが（余りとかしいが）文學ハ文章によつて（多く）顯れる、その文章が亂れて居てハ文學に種類があるやうなと云ふ意昧でした。　細かに言ひますれバ、文學に西洋流義でならうとまた和漢流義であらうと其書くところの文章と一定せられたいが、亂れて居るうら文學の性質がわからぬ樣な心地もしてと言ふ意昧で、倘は細かに言ふて見れバ例へバ詩と書くにて文章ハ極つてる、文章と書くにも文体に二つなけれバい、が日本では言文一致、古文、漢文、直譯体、などの体裁がうちまさつて居て、即ち日本文學の体裁が一定しないと云ふ譯です。恰と茲にパンがある、同じパンだが圓く切らるのも角に切られのもあり、或るものハ三角或るものハ五角に

切られて、一盃の上にある。其体裁か一定しない、即ちバンが一定しないなど言ひたいやうな意味です。 私しが今日は言文一致を見て二三の名家を除くの外は見るに見られないと一概に言ひ切つたのはいかにも放慢な奴、無禮な奴・といらつめ方は嘸ぞ立腹なさりましたらう。固より理想も糸瓜もないやつがれが凡眼、勿論自分でも作のやうな作と一つも書けない併しこんな失言はよくないが、しかし一寸物申して見ましやうか。 言文一致主義の人はいくらゐます? 言文一致の新聞雜誌は?世間の文章は!な〻情ないです!(まだ時節が來ないのですが)私しも博くは見ませんが、今日の言文一致を見ると私しが骨にしみる程感服するのが少ないです。 感服するのが少くないと(讀めない故かもしれぬ)どうも見るに見られないとも言ひたくなりまして…………もとより滿足を望むことは出來ますまい——却つて未熟の文章の見えるのは‖私れやうな‖喜ばしいことです——が吾が文壇社會で熟さないのが數見えるやうでは困るではありませんか!私しは庭の先きに大きな柿樹がありまして、一日(幼時)實が欲しくなつて仰いて見ると蟲喰ひくされ、そでなければ青いれむかりがあつたのにと呆れましたつた。 しかしかやうに申すものゝ決して吾が言文一致は衰へて居る‖若しくは進歩しない——と云ふやうな妄りは申しません、御論じの通りなぜ吾が言文一致は衰へました……聞くも忌まはしい……なぜ吾が言文一致は進歩しないからう!言文一致は今日此頃生れた其發育の早いことは私の庭の柿樹よりも大きくなつた。 試みいらつめ一冊をとつて見ると隨分美しい、實は一杯でも………がしうし……ことを吾が國唯一の文章としやうとするに、これで滿足ですか……見るに見られないと言つたのも實は比較的によつたのです……雜語を用ゐることにつきましては言文一致に於ては目的を達する爲め注意と禁條がある。それは守らるゝものと言文一致外の徒だとは御説でしたが、さういふ手酷ひ眼で今日の言文一致と見るとはや吾が徒は淋しくなつたではありませんか!……杜撰に言語と使ふのは日本語の交つて居る故とどうしても思へ直はされません。 御説によれは其言語は荒増指定されてあるとのことですがしかし指定されてはあるものゝ其言語は極つて居ましやうか?極つてる。正しい語ばかり極つてるとはしましやう、田舍の荒くれものゝ私しのやうなものが言文一致を書く、其指定した地方の言葉としらない、止を得ず平常用ゐて居る言葉を用ゐましたらはや惡いですか?そこを恥つて惡いとしやう(其語とても其地方の言葉でなければ……)。

東京地方の言葉を能く知つたものゝ爲めの言文一致ですか?年月を費さないで誰にも書いたり讀んだり出來る爲めの言文一致ではないのですか?私しが日本語としてよいか悪いか解りかねるものもあると言ふ、それを御了解ないとのことですが別段こゝで説くにも及びますまい……こゝで一ッ困りますれは私しはリーダーアの一二位讀んだ位な英學者ですから御述べになつたコンモンセンスとやらが譯らないで困ります。 コンモンチッスのことではありますまい。 否そんなお間違ひとなりますまい。 そして獨語やら佛語やら何やら譯りませんから折角御述べになつた一段落は了解しませんから御恥しう御坐いまするが御答へ申しません そのしたで私しがどんな粗末な語と用ゐた言文一致でもいかんと言ふことが出來ないと言ひましたのを演繹なさつて、どの文体で書いてもいけんと言ふことが出來ないと仰せられましたが、まさかそんなことはないでしやう。 文体がかはつては言文一致でなくなります。 だがしかし私しの言つた通り用捨なく論理にあてはめたらば御説の通りにもありますか、御説のいけんと言ふことか出來ると言つたのをこれとしも論理にあてはめたならばこれもいけんあれもいけん恐くはいゝと言ふことの出來るのも晴夜の星程もなりますまい………最後に至つて俗語 新字のことですか、私しが俗語を集めて一の大語典(先きに字典と書いたのは實際誤でなく失策でした即ち語典の意味で書いたのは相違ありません)を編ふと言つたのへ御贊成が御坐いませんで、却て御斥け、どうぞもう一度御考へ下さいませ。 充分御研究の上でゝもありましやうかこの段か不必要のものなら私の論は書いた餅、水の泡とでもありましやう。 お斥けになつた点と容易な力で編むことか出來ない、出來たよせ效能がないとの御論。成程容易に出來ないもので、出來ても效能のないものなら無論馬鹿氣た話(の玆に國語字引一冊、漢語字引一冊、獨、佛、英、各一冊よの編んだと假定して御覽なさい。何程の勞がありましやう。(玉編を編む手にはいりないが比較的よ)よし英、獨、佛、日、支、に限らないどこの邦語でも撰擇しなくばなるまいとのことであれば、そりや語典編纂については亦それぞれの論がなくばありますまい。 外國語だからとて何國のも取調べろと云ふ譯にはいかんのです。 先づ吾が國と交渉尤も甚だしい國のも調べなくばなりませんが其他は略して、格別差支ないんです。 もし語典に與らない國の語と差合ひが出來た節は可成譯して譯せないのは原語で書けば宜敷いです。 して却て文學は進歩を杜絶しはしませんかとのことですが、どうも明瞭に了解しませんが何ですか余り語典に拘泥させると却て窮

屈を感しらせて、それで宜しくないてのですか不自由は進歩を放げるとて、ねやかるもれでもか秩序といふものを與へなければなりますまい。私しの考へでは語典編纂は六つの功用かあると思ひます一つには言文一致の文格を定めたり盛んにする爲め、二つには日本の言葉をよくする方便、三つには日本の言を轉訛せさい方便、四つには言葉のかはつた後の世でも今日の作物か讀める様、六つにも似ては居るが語學研究れ爲め、これです。なるいつまでめちや〳〵な文章で居られませう。私しなぞは言文一致が必ず盛んになるかと信じると共にまた早く其盛大を見たい念か起ります。頃日時々本紙へも寄稿された東宮氏に逢ひました。四方山の話の末言語取調所と云ふかなつて目下俗語の取調べ中だとのことを聞きました（東宮氏も其一人）。同所の俗語と取調ぶるのは吾々言文一致者の目的と進ふところもなりましやうがはや其精神は！……新字とても御賛成も御不賛成もありませんでしたが、もうこれもなくパなりますまい。御意見へ……

粗忽なやつの粗忽に筆をとつたなれへ錯雜顚倒讀むに讀まれますまいが、宜しく御判讀下さつて御意見かなつたら御教投下さんませ……

第三十四回懸賞文藝應募得點

題　蔦蔭の猢猻

○和歌

木

枯しの吹きのこしたる蔦の葉れ
かげにましらは何あさるらん………………撫箏女史（ミノ）

深山路よ木かげわやしと立寄れパ
つたよかくるヽましらなりケり………………芮園居士（フクシマ）

蔦蔭れ猢猻の聲よいとゞなは
淋しさ添ふる秋の夕ぐれ………………桑名香甫（トウケイ）

松の枝にましら鳴くなりはふつたの
もミつる秋は物やかなしれ………………横山ひろ（ヒウガ）

子を思ふ心は人にいやましら
つたの葉かげに三聲なくなり………………耕雲（サカヒ）

評　調は高くないですが、意匠は兎に角あります。

以上五首無賞

さなきさに秋も露けれ蔦かげよ
かなしさいとゞましら鳴くなり………………脱兎（トウケイ）

袖あらで身をおく露よぬらそかな
つたのもみぢをたどり行くさる………………本吉さや（ヒウガ）

吹きわるゝあらしをさむみ蔦かげに
さびしさいとゞましらなく聲………………櫻陰子（ミカハ）

行きなやむ旅こそうけれうつの山
蔦の下ミちさるさけぶなり………………三阪きぬ（サカヒ）

以上四首第四等賞

降れさの幾しはましらなくなへよ
蔦の下みち行く人もなし………………三阪きぬ（サカヒ）

おのづからゝ散るべれつたの紅葉々の
梢もとりてなそぶさるかな………………横山ひろ（ヒウガ）

松の枝を傳ふましらよ色付し
つたのもみぢを木の實とや思ふ………………同上

評　風情も心も共よ妙です。

以上三首第三等賞

○唱歌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（イ）　まつの（イヘシロ）

梢をあらす風もなし。燃るばかりの（霜にそめたる）
つたかつら。しげりかゝりていと高し（ケヅル）
深山の奥の其ハざま（ケヅル）木の實に類とふくらし
て、餘念のなきや親も子も　枝より枝にあそぶなり。
などて彼等よあらざりし。何とて人にハ生れ來し。
ひめ君公子すぎしもめ　磐城判官今ハいこ（いづく）。
おもうげさへもあさけあや。憂きことときれ（ら）ねさび
錄や。きこりの道に迷ふなり。何なごむるといふ聲
も　答ふる聲も涙のみ。今ハましらにあらぬ身と
うてつ二人の姉弟　そぶれかまくか蔦のかげ（ケヅル）
親子兄弟怡樂あり（ケヅル）。

評　詞書の無ければ意味の充分にならぬ作です。

（ロ）　小富士（トミ）

秋の色を　松にもみする　蔦かづら、くれある深き
夕つく日、さす下かげよ　むれあそぶ　ましらの聲の
かまびすし。ふきくる風に　はらゝゝと　落る木の實に
驚ろきて、木の葉とゝもに　ちりぐに　にげゆくあとは
木がらしの　梢をはらふ　音さのく、外にいろなき
夕まぐれ。

（ハ）　水野秀（ナオサカ）

樵夫のあとも絶えはてゝ　山路遠けく（おふかく）
分け入れば　入れば入る程晝すごし（晝猶ひすごし木下
闇）。　梢にあれる風さへも（ケヅル）　蔦の葛にか
らまれて（ケヅル）　碎けんばかり響きけり（ケヅル）
梢の床に蔦のやね　風れ音樂水かゞみ　ましらの身
こそ幸れはし（たのしけれ）。パラダイス！　パラダイ
ス！　ましらの身こそ今さゝに！

以上三曲無賞

（ロ）　碧溪閑史（オホサカ）

なさ々の露に葉をそめて、いろにぞいづる蔦もみぢ、
れもひましられ夕てりに　おもはづかしみまひわたる。

評　調は中々妙です。意匠の稍下品です。

右第三等賞

文章

（イ）　あす香（イヘシロ）

名さへ恐ろしい鬼の面山も隨分嶮岨なのです。一方ハ
白川よりの會津街道勢至堂嶺よ續き、他の一方は大石巖々、
其下ハ千尋の深壑、晝尚は幽暗、鳥も獸も容易にハ通さぬ處
人も勿論です。地獄谷とでも言ぬのでしやう。此處の巖
上に偃蹇と立てるのも世を捨てた幾株の老松、此老松を力に
纏ひかゝつてゐるれは詩に所謂蔦と女蘿、此蔭に本領を占め
て睦しく生活するのは猿猴の一族です。或るときも樹梢、
或るときも巖は上。打ち群れて樂しげに戯れ遊んでゐます。

が、猟師の銃丸も飛んだ事ハ嘗て無いとの事でそ。
嗚呼止まるに於て其止まる所を知る。名奔利走し禍を招き、毒を流ず、彼れ何人ぞ。　此猿公を見せてやりたい者です。

（ロ）　[illegible]さち子（トナイ）

角田川といへバ櫻の名所、瀧の川といへバ紅葉ハ名所、花も紅葉も兼ねたるハ上野、その上野ハ余所にして瀧の川の紅葉見んとあまたの人ひさごに旦りで、思ひ〳〵ハ出立ちも紅葉に心引されて、うかれ出たる其中に七十余りの老人、唐人の稀といひたる年なれどいとすこやうよ孫と合乗りの手車より門の入口おてれり、供の車夫に向かひて、
老「佐吉手前ハ先へ行ッて、おれらが來る事、婆アやよ知らせてくれ。」
佐「かしこまりました。　ちや御免かうむります。」
と一禮しながら車引きながら此事知らそれば五十斗の女手すきはづしながら飛で出來り、
女「あら若様も御一所よ入らしッて。　まア嬉しい事。　きのふから大勢の人のうちよお見え遊バすかと存じて、外バかり見てゐました。　こちらへ御かゝり遊バせ。」
とこしかけの塵打拂ひ、佐吉がさし出せし毛氈受取ッて敷き烟草盆あはし、勝手の方むきて、
「秋ちやんお茶入れて下さいあ。」
秋「はい。」

と十三四の娘茶を持ッて來る。　袖を引いて耳に口、秋と呼バれた娘うなづきて、勝手より重箱持來る、婆アや受取て、
「さア〳〵若様がお好と存じて、今朝此子の内でおしらへさせました。　お菓子を召上ッて下さいませ。」
とほく〳〵喜び、
「御隠居様もあなたも柔かな内に如何で御座います。　佐吉どんも此處へ來て、お相伴して下さい。」
と木に餅ハなるやうな喜び。（一）昔奉公してゐた主人、孫よ我乳飲ませた人の親と子、あんでこれが麁末になりましやうか（二）。　老人は持來りし養老酒と飲みあゝら後の松にかゝッてゐる蔦のもみぢをしげ〳〵と詠めゐたりしが
老「あゝよく染めた。　實に蔦の紅葉とハこの事だ。　奇妙〳〵と賞めながら矢立の筆ぬきとり、鼻紙へさら〳〵と何か書付たのを孫ハ子ハのぞき見て、
孫「お祖父さん何を書いたの？　お祖父さん。」
老「これが。　蔦が見事よ紅葉したから出たら先をやッたぢや。」
孫「さう僕讀んで見やう。」
と手に取りて

蔦りつら松の常盤を友として
　千歳の秋の色ぶ出よけり

「やアうまいなア。　お祖母さんとハ上手だねお祖父さん

んれ。」

「はゝゝお祖父さんれ方が上手と思ふか。　竹坊もやッて御覧。」

「僕にハ歌なんぞは出來やせん。　夫より柿食べやうや。」

と柿の大きいのを丸ありでむしや〳〵。　これを見て婆アやは笑ひながら、

「若様割つて上げましやうか！」

「うゝん！　丸れ方がうまいよ。　佐吉なんぞ皮なりで食べるよ。」

「はゝゝ丁度猿のやうで御座いますね。　猿と申せバ先日から猿の子と置きましたが内に置ますといたづらバかりしますから松の根の日あたりに出して置きました。　何處へ行きましたらう。」

と其處等見まハし、

「三吉や〳〵あゝこゝに寐てゐました。　まだねむさうにしてゐます。　若狹様お呼び遊バして御覧あさいませ。」

「猿來い！　猿來い！　あハゝゝ。」

「それぢやわかりますまい。」

「さうかえ。　お祖父さん。　猿御覧あさい。　そして僕お紙」といひつゝ紙をとり、立てゝ打りしを見て、老人は

「何をするのぢや。　餅でものせるかと思へば。」

「僕天狗俳諧しやうな。　一番お祖父さん。　三番に佐吉、こゝへ、お書よ。　さア三番目の人……」

「誰？」

「あのう秋ちやんさ。　お書きどうでもいゝからさ。　鉛筆いや……いやで無い、れ書きよ。」

と無理にかゝせ、自分も書き付け、

「さア婆アやお書きよ。」

「はい。　何も若様のお慰えで御座います。」

と書付て明て見れは、

蔦かげお坐睡つてゐる猿おきよ
柿とやらうか餅とやらうの

これよて皆々大笑して柿を猿にやる人もあり、餅を食ふやら、養老酒と飲むやら、喜び余りしその二人の主人を載せて引て歸るもの佐吉即ち車夫てす(三)

評

(一)木よ餅のなる喜びでは通じません。　れつそ「我を忘るゝ追從」ぐらゐにした方が宜しいでしやう。

(二)元來此文の性質と雅俗折衷体、それ故どこ迄もそれで押し通し、こゝをバ「いかで是か粗末にあるべき」位にしたがいゝです。

(三)も同じ譯で「車夫なり」としたが宜しいです。

芮園居士(フルイ)

(ハ)

嗚呼世が世ならバ……その歎聲を發するものハ世間にいくらも有りますが特に昔の武士に多いです。

第七十七號　(一九)

茲は片山里の猶ほ山里、壹緡ぞ寂しき一軒家、況して夜、況して親子三人、況して此夜は母子二人、何故でしやうか？抑も此家の主人といふは維新以前ぞ錚々たる武士、世の變遷につれて、其身の變遷、今の有様となッて見れば確固とした業とては無く、去りとて何のやらあんと口が干るといふ所より嘗て腕に覺えのある鐵砲を携へ、深山を渉りて世を渉るのです。今日も例の如く獵に出て餘り歸りの遲い故、餘程待つては居たられど子供は常とて

「お母さんもうお腹がすいたよう。 ええッてお母さん」

「今上げるよ。 だからおとなしくしてをるのね。」

膳腕を出して飯を喫べさすれば、

「お母さんは何故喫べないの？」

「あのお母さんはお父さんが歸ッてから喫べるから坊は成人しくしておいでよ。」

「一人なら喫べない。 お母さんも……ええッてッ。」

と泣き出しました故止むなく母は食事を終へ、寐氣を催ほせし子供を寐かし置きて針仕事を始めました。 あゝどんなに寂しいでしやう？ 折りしも後山の蔦蔭に獼猴の聲喧すしく一層寂しさを増しました。 突然！

「あらお母さん」

泣き出しましたーましらの聲に驚いて、

「今直にお母さんも寐るから默ッてお寐よ。」

「恐いよお母さん。」

「何も恐いことはない……お父さんなぞ御覧。 今頃何處ふとらるゝやら。」

「お父さんは喰はれたのだ―あれに……」

一層聲を振りあげて泣きました。 嗚呼此婦人！ 嗚呼此母！ 何んなに寂しいでしやうか。 何んなに苦しいでしやうか。 嗚呼此父！ 未明より出でゝ夜に歸る。 只其子の寐顏を見るばかり。 何んなに悲しいでせうか。 何んなに切ないでしやうか。 定めて夫婦諸共「世が世ならば」と歎いたでしやう。

蔦（一）

竹下山人（フジマ）

蔦蔭と九重の御座より象ッたと見えて、稍年經ッ（老い）たましらは小柴を笏に數（五六）匹の小猿に何事やらん言ひ聽かす（せ）る様を見て、あッけに取られ、「こりや」と大喝一聲我知らず叫びました。 聲より騷ぐ大猿小猿、飛び越え跳ね越え、我れ先きにと逃げ散りました。 後に呆然顏見合はせたのもそも（ケヅル）私と高山といふ友人でした。 共に口を鳴しながら物蔭から其處に立ち出でます（る）と不思義にも米を入れる鍋を見出しました。 それはと兩人（は）又茫然。

此時山手の方から炭燒の翁が來かゝりました（る体）、折こそよかれと簡短に物語ッたのは今の次第、翁はたと手を

打ち、
「それこそ今朝ほど私の奪は（取ら）れた品物でそ。　さては其奴共の仕業よな（か）。
恨めしそうに腰を伸ばしましだ（ケヅル）

（ホ）　　仝　上

目に餘る白銀の山を打ち（ケヅル）越え、犬に後先を衛らせあぐら雪烟（ケヅル）をひら〳〵と（ケッル）蹴たて、蹴ちらし、息と切ッて谷間を指して來る一人の獵人、血眼よなッて遙か彼方を見遣り、見かへし（ケヅル）、
「彼奴何處にゐる……笹木（犬の名）！　白尾（犬の名）！」
主人の顔を尻目に懸け、一散よ駈け出す兩狗、透間無く主人につゞく。
白栲の衣を以て稍小蔭をつくッた蔦かつらの下に頻りに口を皺めあぐら常さへ赤い顔を朱のやうにした一頭の大獼猴、今來た方を見て忽ち顔を背むけ、兩手を眼に當てた瞬時の早業。　折りのらズドン（砲聲）。　何事？
以上五章無賞

（へ）　　草片屋少女（トロケイ）

「これお雪さん、もうお泣きで無れ。　私もわらましれ末よを聞いたが、なんのあれしきの物毀したればとて、何事かあるべき。　よッ！　よッ！　お泣きであい。　悔しの らん。　悔しからん。　悔しきも理ぞ、たとひ如何ある事のなきはとて亂暴な、人を――粗鹿でしたもれを煙管で毆つとは　お雪さん腹も立つらうが了見してお呉れ。　ほんに彼の鬼婆めどんな目にでも遇わしてやりたいが、これお雪さん。　いやしい妾――昔風でいへば私の爲先には家來分――召使のもれなれど、何を申せ今は表向き母と名の付くもの、角芽つはせ人の笑物、後指される計り。　お雪さん腹も立たうが、何事も了見してお呉れ。　堪忍してお呉れ。　よッ！　よッ！」
親切ある從兄の言葉、氣の毒にあるまで身よ染みて、最早殘念さは何時か失せて、難有いやら嬉しいやら、譯の解からぬ思ひよ胸は唯むら〳〵。

＊　✿　＊　✿　＊　✿　＊　✿

あゝ忘れもえせぬ、嬉しかりつる――否あむしろ羞かしのりし前の年、吾二七の秋の暮、吾……孫の爲めには繼母のお金どの、今は……今は淺ましき別當の妻とは成り下り居らるれど其頃の羽風のすさまじさ　思ひ出すだにおそろしや。
あゝそれよそれ長月の十日あまり、今宵は月見の宴と開かんとて仕度忙はしき央、吾は二階の飾り付けと吩付けられ、白菊の折枝も思ふまゝよ生け了へて、一軸しづかに操りおろそ途端、如何なるとづみり落ちて、ばッたり！　床よ在りし家の重寶――蔦蔭にたはぶるゝ小猿三匹――高麗古渡りの燒物は無慘！　何とせん！　脆くも微塵よ碎けたり。
右第四等賞

（ト）　水野秀

思ひ起せバ既に十歳せの昔、まだ田舎住ひの一小女たりし時収穫も終へ間を得たればとて、母に手を曳かれ、姉を伴ひ、近隣の者ともにカナゼラ詣をなせしことありき。秋郊草枯れて虫聲の疎愁を聽き、獨木橋下雁影の冷かなるを見てハ何となく荒涼に堪へかねしも、薄兒紅帯びし楓と見てハ美妙を知らぬ心にもいとゞ面白く感じたり。かくて一歩一歩に山道深く踏入りて、言ふも楽しき一大奇觀に逢ひぬ

「あなた何でしやうあれハ？」

「あれですか？　あれハ蔦葛でしやう。」

「阿母さんそこにです。」

「よく御覽あそこを！」

敎しへられしまゝ瞳を凝らして見ればとある老松を攀ぢて登りて、いと高き枝より下へ、下より上へ恰も檣を保つ綱の如くに見えけり。

「阿母さん猴が居ります……」

「何處に？」

「あれ最前の蔦の中に。」

「ほんにぶら下ッて居ますよ。」

敏捷の猴早くも見る人ありと知りしか自慢らしく上下自由に回旋自在にその隠し藝を演じゝり。　一行の失笑に驚きけん、忽ち蔦蔭深き處に隠れしと思へバ鋏ち現れて「キーキー」と叫び、或ひ珠數の如く連りてブランコとなり、或ハ別れて珠燈を吊したる様ともなりて、その輕妙れ技笑坪に入ること深かりき。　幼な心に面白かりき。

妾は歸りて、土産にもなれかしと熱心に一伍一什を語りければ父微笑して、

「さぞ愉快なりしならん」

と言へりき。　默して語らざりし姉く日あらずして風に動かんとするの蔦、將に跳らんとするの猿は（を）一片紙上に現はれ（し）けれバ父一見して姉よく筆し、妹よく辨じたりといへり。　あゝ思へバ果なき浮世かな。　如何に語ればとて如何に畫けバとて、父遠く去りて聽へず。　生者離散して、東西相恨めり。　時に故畫一片依然として、十歳の昔を吊へり。

（チ）　花翠

二人とも二八許りの處女、多分ハ從妹同志、睦しげに日課の話、

「あなたがね昨日學校で滿点を御取んなすッた畫學を拜見な。」

「あら厭でよ。　彼んな下手な者を。」

「さうおッしやらずにまア……　妾が一寸思ひついた事があるのですから」

「それでハ御目にかけましやうか外の人に御見せなすッち

や厭よ。」

「な丶之れですか。　此畫は何から浮寫しなすつたの？」

「夫れハ少し言はれない事が有て……」

「妾しの當て丶見ましやうか。　ときてね彼のいらつめの……當りましたらう。」

「能く御存じね。　昨日學校で先生が何でも自分の思つる者を畫々とおつしやッたのでつひいらつめの題を拜借致したの……」

「なよしろ本當に旨く美事に出來ましたね。　蔦の鹽梅から猿の容貌、如何にも生きて居る樣で……あなた氣を付けないとせッかく畫いたのを逃られますよ。」

「おひやかしなそッては厭よ。　ですから先刻御目に掛けないと申したよ。」

「御立腹でハ恐れ入りますが本當の事を申し上げたので……わら猴が少し動き出してよ……籠へ入をましやうか。」

「たんとおひやかしなさいまし。　ようございますから。　妾の面付が猿の樣な（だ）もんですから畫學にあてつけてよ。あなたにはね………」

「いやに脇へそれて御立腹ですねェ。　畫學が美麗に出來たから恰も（丁度）生きて動く樣だと形容致したれで、何もあなたの事を申した譯ぢやございませんが、御氣に障りましたら何卒應分の御處罰を願います。」

「存じませんよ。」

始めハ内こそをとなしさうな言葉づかひも謙遜、が、少しの間違ひから今そ對敵、つぶやく聲も荒々しく、これも遠慮のない證據。

折りしも此室の前を通り掛りたるは此家の主人らしく、此聲と聞きつけて、障子をがらり、

「復初まッたね、お前達は自分の居間で勉強とさへしてゐれバ夫れで旨いのだ。　寄ると障はると喧嘩ばかりを商賣の樣な……丸で猿の見みたいだ。」

行き過ぎたあとを見送りて二人とも等しく小聲で、

「やかましいおやぢだ。　まるで猩々みたいだ。」

評　會話は一寸と輕く出來ました。

木がらしの（リ）

小富士（イニ）

さけぶ梢、　いとたかし（ケヅル）

かげうすき　山の端の月。　ものすごし（ケヅル）

蔦の下道　ひやゝかに　露しろし（露しろき蔦のした道）、

ふみわけて、　何かあさる。　迷ひては（ケヅル）

子故のやみに　かへらねは　親のこゝろ（朝四暮三それ子のため。）

とく明方に猿の（が）子と抱き（い）て、蔦の（ケヅル）蔭に居る畫の賛を書いてあッたのです（でした。）

隙間の風も塞いとめ切ッる障子の（も）今日ぞ珍らしい

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（い）暖かさに打（ケヅル）ひらかれて（ケッル）—落ちのこる葉がくれにちらほら見ゆる櫻山吹あせのかへり咲と一輪二輪と數へて居た庭の折戸口より（から）下女がお孃さま只今御はあれのお庭先きへ狙公が來ッてをります、おはやくゐらしッて御らんあそばせといふよ、おやそう（さう）と祖父の居間へ行ッて見ます（る）と五十有余の老夫が一疋の猿に赤い縮袢よふ（やう）のものを着せて、いろ〳〵の眞似とさせて居ましたが（ケッル）。妾を見ると（て）そられ孃さまへお辭義しやといひますと（ふ）と猿ハ手に持てゐた竹の杖を投げすてゝ、頭を下る。祖父ハ笑ひあがらお褒美を與へますと（やれバ）、戴いて旨さうに喰べて居ますと（ました）。老夫は手切のあらい煙草を煙管につきながら（つめこミ）、御隱居さまあの猿は去年の秋わたしが山芋を堀ろふ（らう）と思ッて山深く參りましたけれど、見えませんから漸々と深く辿ッて行きますと、左手ハ深い谷よ、右手の方ハ岩松がそこらに生へてゐる高い崖にあッてゐるところへ參りました。丁度此時分でございますから蔦ハみどりの常盤木を我物顔よ這ひまつとり、美しく紅を染え出してゐます（ました）。蔦かつらよすかッて一疋の猿か子猿を此方の道へ置て、木の果を取ッてゐましたが、人を見るや否や飛び込んだのかキヤッともいッて谷の底へ落ちました。子猿ハ親猿の聲お吃驚して、逃よう（やう）とするれをやがて捕へてかへり、夫からいろ〳〵の事を敎へてかよふ（やう）よいたしてゐますが、敎へれバ猴でも私一人養ッてくれますが、敎へがあいと私のよふ（やう）に、とゝゝと問もがたりを今回の題に因んでゐるとおもひましたから其まゝを（ケッル）。

評　寸鐵人を殺すとでもいふ結末です。

以上三章第三等賞

（ヌ）　藤元ゆさ（サカ）

幾千條の（ケヅル）蔦（と）露霜に其（ケヅル）葉を染めて、紅の色こまやかに松杉れ肌よ纏ひ、彌生の花（も）こゝに（ケヅル）姻お匂ひ（へと）、蜀江の錦（も）かしこに（ケヅル）風に翻へる、れやこれ鮮麗の中はそも其（そも誰の）住家？　見れバ彌猿の母子（が）二個（疋）、半バ肩を日（夕）陽よ乾して、或ハ握手或ヒ接吻、時ありては（としては）互に高く嘯く、ても（ケヅル）其遊びの無邪氣な！

折から茲に來る一人の獵夫、流石ハ無慈悲の瞳に、のがさじと忽ちそれを認め、身を岩根に寄せるや否や、早や手を掛ける其ク（ひ）き金、早や定まる其狙ひ、慘烈（酷）の身構へ容易に整ッて滿腔殺虐の精神ハたゞその蔦蔭に向ふ（ひました。）

ちらり！　それを見た母の彌猴—如何で驚かざらん—（ケヅル）、恩愛の絶叫一聲＝それもまだ空氣に響かぬに＝激電の勢ひ！　子を抱いたまゝ驀然谷間に向ッて落つ（へ……）。

一發の砲聲(と)いたづらに山姫の夢を破ッたばかり、獵夫は空しく其場を去る、去る(ッてやゝ)雲時、以前の母子の獼猴(と)うち連れて、もとの處にかへる時に(ケヅル)夕日は斜めに照して蔦蔭ハ一しほの鮮麗かさ。

日ぐ山の峡に沈みかゝりました。(ル)

敬々女史(ナイ)

平地で見ればバ遠山が紫ばんで、薄紅の色がほんのりと空の四方に擴がり、鳥も遊びあきたのか妻子引き連れて塒にかへる比はひハ谷底とて美しい夕やけも茲迄は及ばず、外の騷しさもまゝヘ聞えず、唯ちよろ〳〵と流れる小川が我顏にナイルを氣取ッて居るれが朧氣に見え、一種何となく寂寞れ氣が其傍りに行渡ッてゐる。夫に又一秒々々と闇さがまさるせゐか梟の聲など聞え初めて次第に凄さが加ゝるやうに思はれ(まし)た。

折から此所へ枯草を踏布いて急いで一人の男が來(まし)た。筒袖れ着物と艸鞋はいき、夫れに藤蔓の編頭巾、言はずと知れた獵師で(した)。近所れよろ〳〵眺めながら、

「ちッ畜生め、どけへ逃げやアがッた。いゝ馬鹿々々しい。此日がな一日かゝぞりまはッて、兎一匹打たぞ、折角見つけた大猿に逃げられちや餅も搗けやアしねェ。餓鬼めらが何處で聞いて來やアがッたか、ちやんよゥ、もゥ三ッ寢ると正月だッて、だからうれしいが、雜煮の餅ア何時搗くッて。おらア臟腑ー引ッきられる樣だッた。ぐごの悪く無ェあアあいつらもよ。畜生! 猿めぜッち逃げたな? 畜生!」

やがて目を叢の少しくがさ〳〵する方へ注んだ、今時!

「居た〳〵こいつ!」

手が引金へかゝる、發矢! 一瞬間! 蔦蔭の猿ハ涙はら〳〵、片手で敵人拜んで、片手で腹ー能く見れば餘程大きくなッて居る腹ーを悲しさうに指して、切りに切りお………子を持ッた親心、鐵砲投捨てゝ地へペッたり、

「餅は食ふまい。」

評◎◎◎◎◎◎◎◎ 勢のある文です。結句は價千金。

以上三章第二等賞

文學小言

俳諧家ハ西洋韵文評

西洋の韵文に餘情といふ物が無いと或る一部の俳諧家が云ふとの事です。俳諧家は何を見てさう斷言した物か、疑へバ食ぐすぎらひ、もしも食はず嫌ひで無いものならバ吾々は其目の行至らぬのを怪しむのです。苟しくも節奏に因つて文を行ひ、即ち韵文を作るに於ては何うしても餘情含蓄は引續く、その有無と言ふのぐ士魂韵文の性質を知らぬ者としか思はれません。例を引く迄も無い事、よくまづ西洋の韵文について見ればバ分かる事です。

戲曲の方針

國會紙上れ忍月君の戲曲論は國民の友紙上の韻文論と彼是反映しゝ韵文學上の論でゐ。中で忍月氏ぐ言ひました。戲曲は韻文の上乘の物、或ハ隗からも始めたいと。吾々も氏れ此言葉には元より両手を擧げて賛同ゐます。一日も早く實物の見本が現はれるのを望むと同時、ぞのやうな

方針を以て氏は其戯曲を作る所存か、まづそれが聞きたいものです。

狂詩、狂歌、猥褻

狂詩、狂歌などの多數に見える猥褻は所謂絶粋の猥褻です。作家の眼が猥褻の忌むべき處を見せるで無く、むしろ猥褻を一つの玩弄として取扱ふ事、即ち是が純粋の猥褻、もつとも嫌ふべく、いやしむべき事なのです。何の見る處が有ッて「日本の文華」は近頃この種類の猥褻ればかりを掲げ出したことか、吾々は其意と知るのに困しみます。と言へば辨護するものは、それを猥褻で無いと云ふか知らず、辨護人の口實が、しかし、この邊に止まるならばそもそも其辨護は弱いのです。何となればそれら狂詩杯の目的が猥褻を毒として示すで無く、之を食物として示した事――よし滋味とはせぬ迄も――は明らかに認めの付た事です。昨冬を限り發刊した雜誌に對してあのやうな事を言ふのは心無いやうですが、折が有つた儘敢て言ひました。

時感三十首

千葉胤麿（十七）

おのがすむ家はやれぬと打捨て丶人の軒端にたれかやどかる
くちにのみ物しりぶりの世の人は鳩や鴉にしかずぞありける
よのつねの人かとばかり思ひしにひとのかはきる獸ありけり
ふやはこを子は親をおもふ世の中に國を思はぬ人あるもなに
くれたけの憂ふししげき世の中は月と花とにわくがれなまし
たをやめは機れるあやの打亂れいづれ經ともわかぬ世のなか
ゆめのよに夢みるゆめのさめやらで夢の中にて夢を見るかな
しきしまの道をもわけ踏み見ずで御國を經る人のはかなき
そめうみの御ふまをうけし吾よりも猿ぞさかしき獸なりける

うらやすの安らの國の年々にうらなみわらくそよぐあしはら
ねがひとば何ともかなはぬもならばよろづよも經ん人は齡は
きみがため盡す心もかたときもわするゝときのなきぞ人なる
としからぬ命をすらもとよくにの惠みは風にあびきながらふ
たまれどの絶なんまでもみがきてんすめらみくにの日本心を
くにのため碎く思ひはなからまば安眠るよひもあらぬべきかな
よのなかの濁りてなれし身なれども暑き寒さは變らざりけり
よしや身も水なりと消てながるとも仇なる名をし世は殘さじ
きみおみの別しらぬくなだふれきためて玉へみもしらぬかみ
おほきみの御爲とならむ矢玉ふる中よたつをも豈いとどめや
ひとすぢの莖にみのれるひさごすら同じ形はならずありけり
よしやよは開らずとても外國の其あなどりをなどかうくべき
もゝとせの齡はなくも大君にたてしいさをのあらばたりなん
けふわした細き煙りもたえだえにきるゝはかりの民の玉のを
ふくかぜに流るゝ雲ぞはかなき何を頼みに世にやすむべき
そのとがと讓ひきよめてのちにこそ神は惠とうくべかりけれ
ひらけゆく國の習ひかしらねども日々に増するある國の憂ひと
あちきなし襖れてふりあゐひまどひ忘れもてたる已が大きよ
よのちりと風に拂はれかせにきる野路の姫松いつにうからん

かゝるも横さの道を歩きつゝ人はしらずともおもふおろかさ

ふでとれば世の行末をかこつより外よくるべき言の葉もなし

通信問答

三坂きぬ――御尋ねれ事と霎庭篁村氏に尋ねました處、左の通り御答へが來ました故全文を掲げて御目に掛けます。――「上略またやさしき御便りに我れが撰みし新七艸を告げてよとの事、世になれ、清けしき心地に覺え候。即ち新七艸は雁來紅、水引、發艸、黃蜀葵、ぎぼうし、秋海棠に御座候。此うち玉簪化（ぎぼうし）は夏の物の由にこれあり候へども見渡したる處秋の野に生ひ立てれば億良殿が常夏といふ撫子と入れし古例と取り、拔きさし致さす候。又友人川崎千虎翁もとをとこへし、紫苑、龍膽、萩宜、糸瓜、菊、牽牛子を撰まれ候。此うち牽牛子は朝顔が桔梗ときまりしより今の入谷は朝顔を入れられしにく候。此うゝ菊はちと如何にやと思はれ、翁も今一旦よく考へあればと首を傾むけられ候。また友人高橋應眞氏もされもりう、芙蓉、かやつり、野菊、白粉、蕉爪、千日坊主と撰まれ候。千日坊主はちと俗氣を離れ候ふり、蕉爪はさすが書家だけによき見つけ物に候。右おきぬさまへ御答へ下さるべく願上候。（ろし）」

紫花雄――（一）野村列樹氏は山口縣吉敷郡の人です（二）「雅人」と「吾婦布里」何れも純粹の文學雜誌と云ふよりは寧ろ圖珍風れ物です（三）佐保姫は日本古傳の春れ神です。

櫻陰子―――（一）納豆は元ゝ腐敗物ゆゑ衛生上あまりよく無いとの事です（二）胡桃又ハ胡麻の寄せ物のッナギにハ是非葛か寒天を入れなければ纏まりません（三）唐縮緬を羅紗に擬へる法ハ知りません

柳子――（一）當今屈指の文學者中に令夫人の有るのハ少い方でせう。忍月、露伴、紅葉、美妙、さゞのや、不知庵諸氏何をも無妻です。其有妻の令夫人ハ種類に仰せの賤業者上りハ數と言ふ數よハ爲ッて居ません。元より文學者れ數も少い事ながら何れも正當な結婚よ因ッて令夫人と迎へたれです（二）明治女學校高等科を卒業すれば普通の文學思想ハたしかに持てませう（三）面白い御問です。甲女が片思ひに乙男を思ふ、それが眞正の愛と云へるか何うかは先づ其眞正の愛の性質を定めてから後に斷言をすべき事です。愛も如何にも双方五分々々の程度に進んだのが完全の愛です。そして又眞正の愛とも言へます。但しそんなら片方一分片方九分、或ハ一方皆無一方十分の愛が眞正の愛と言へぬかと云ふに決してゝさうでは有りません。此類の愛ハ完全の愛で無いのです。眞正の愛といふに於てそもゝゝ何れ妨げが有りましやう。比へばこゝに不孝な子を慈母が愛するとして、此類の愛も不完全な愛でしやう、双方相愛さぬ故完全とハ言へますまい。但し母れ愛が不眞實の愛とハ同時にまた言へますまい。男女の間に於てもこれと理ハ同じでそ。

つらき――御尋ねの件ハ長文に爲りさうゆゑ次号れ本紙上に出す事よしました。

つね子――日外から美妙齋氏が着手されて居る韻文長篇はこの三月頃で無くても世に出せますまい。

きぬ子――（一）「お前麻布で氣で知きぬ」といふ昔れ俚歌が有ります。で「氣が麻布」とはそれ故氣が知れぬといふ譯でせう（二）月經は大抵一月一回宛日れ定まッた物です。普通より七日も日が違ふのハ其時さしたる兆候ハ無いにしろ、兎に角身体の變動ゆゑ成るべくし服藥して整へるが宜しいです。

ＬＮ――（一）抽象的は俗解すると無形といふ事、結象的ハ同じく有形といふ事です（二）西洋の詩人ハ人情景叙双つながら中々長じて居ます。日本れ詩人も景叙が於てハ中々いゝですが猶西洋ほど深く無いです（三）「いちご姫」、「憂世」の根據れ半分ハ正史で半分ハ想像です（四）文學會の景況と書く雜誌はありません。會員ハ今日の文學者何れも皆會員です。

○新刊

妾薄命（新著百種第十一号、盧心亭主人作）

人道教（京都吉田平二郎氏著、非賣品）

美術世界（渡邊省亭氏編輯、月一回雜誌、春陽堂發兌）

妾薄命は無邪氣な作で、一寸面白い小説です。新著百種中ではは妹背貝よりは優つて居ます。

人道教ハ一部の道德書で、博學、篤行の二門に分ち、修德れ道を說いた物です。著者の意は人道教を建てる處よあり、即ち其大意をこゝに錄したのが此書です。其言ふ所、既に前哲の道德書に全く無いでは無いものゝ、世れ爲にするとの著者の意ハ分かりました。望みの人よハ郵劵二錢送り次第一部を送るとの事です。

美術世界、此批評ハ次号に讓りませう。

いらつめ雑誌定價改正の社告

稍改正の端は當号でも開きましたが版權の都合により當号は二部を合本にして置きました。次号即ち七十八号からそ左の通りの定價に引上げ、讀む處を多くします。

並製

一部金五錢、府外郵税別に五厘
六部金二十七錢、府外郵税別に三錢
十二部金五十四錢、府外郵税別に六錢
二十四部金一圓、府外郵税別に十二錢

別製

一部金八錢、府外郵税別に五厘
六部金四十七錢、府外郵税別に三錢
二十四部金一圓八十八錢、府外郵税別に十二錢

(別製は最良の洋紙に印刷し且毎号内外國景色、風俗、花卉、美術、動物、英傑、學者、美人等の寫眞を必らず少くも一葉以上添へ、讀者の娯樂に供します。但し豫約者の注文により風俗、景色、其他何にもしろ、毎号同じ種類の物を揃へても宜しいです。)

毎月二回發兌(日取從前の通り)

記事に於てそ本号から**文學小言**といふ物を加へました

(遞信省認可)

音樂雑誌第三號

十一月廿五日發兌
定價一冊六錢
六冊三十五錢
全國中不要郵税

勅語 及 訓令、訓示

音樂 ●音樂は風教上に及ぼす影況　妹尾繁極君

●帝國議會開院之頌 第一　上眞行君作曲 ヂトリヒ君調和
●同 第二　中府秋香君作歌 芝葛鎮君作曲

歌曲 ●同 兒歌　加部嚴夫君作歌 伊澤修二君校閲 小山作之助君作曲
●同 祝歌五章　雪は舍主人作歌
●湊川　落合直文君

寄書 ●鎌倉行の歌●發刊の祝歌五章
●音樂談(承前)　永井建子君
●智徳上に及ぼす音樂の勢力を論ず　伊東達彦君
●音樂雑誌の發行を祝す　小山喜市君

雑録 ●源博雅卿略傳●セバスチャンバハ氏の傳(其二)
●東京府唱歌檢定試驗問題

參考 ●荏原郡の獅子舞圖及略譜(承前)
●颯々時雨豫章及略譜

博覧館 ●メーソン先生の眞影幷に唱歌掛圖
●能管死落と千鳥●震天動地の太鼓

小説 ●玉笛童子 二律　人籟樂士

問答 ●三件

雜纂 ●一万人の合唱●大山邸の行啓●天長節の祝賀式●能樂御覧●偕樂園●高等中學校唱歌●能樂の復活●日本音樂會例會●山葉の風琴●攻城學校の軍歌●祇園館の音樂會●天の岩戸の書●建像儀式の奏樂●樂譜彫刻家●東洋音樂會●國學院開院式●開校式

社告 ●數件　**廣告** ●數件

東京麹町區有樂町一丁目五番地　音樂雑誌社